日本学生支援機構委託事業　国際交流拠点事業
兵庫国際交流会館における国際交流拠点推進事業

神戸大学グローバル教育センターG-Navi
「ランゲージサロン（中国語）」活動報告書

２０２４年3月３１日

神戸大学グローバル教育センター

目次

１．はじめに 1
２．サロンの設計 1
３．講師概要 2
４．サロンでの活動の詳細 3
　４．１各回の流れ 3
　４．２空間デザイン 4
５．参加者からのフィードバック 4
　５．１参加者概要 4
　５．２アンケート結果の概要 4
　５．３参加者からの意見や感想 5
６．講師の評価 5
　６．１成果 5
　６．２課題と今後の指針・展望 6
７．おわりに 8
謝辞 8

【執筆者】
四宮（シノミヤ） 愛子（アイコ） （神戸大学非常勤講師）
余（ユ） 玟欣（ウェンシン）（神戸大学研究員）
井上（イノウエ） 高輔（コウスケ）（神戸大学グローバル教育センター特命助教）

【執筆担当】
第１節…井上
第２節…四宮、井上
第３節…四宮、井上
第４．１節…四宮、余
第４．２節…四宮
第５節…井上
第６節…四宮、余
第７節…井上

１．はじめに

本報告書は、神戸大学グローバル教育センターが日本学生支援機構委託事業として受託している「兵庫国際交流会館における国際交流拠点推進事業」(通称 G-Navi、事業期間:2019～2023 年度）の一環として実施された「ランゲージサロン（中国語)」の 2023 年度の活動について報告するものである。

「ランゲージサロン（中国語)」は、G-Navi が「ランゲージサロン」としてこれまで実施してきたプログラムの一種である。「ランゲージサロン」は、多言語での学習と交流を目的とした会話イベントであり、他には英語や韓国語、イタリア語、日本語を取り上げて実施してきた。各言語を用いながら、身近なテーマについて講師と参加者たちが会話を実践するプログラムである。媒介語として日本語を用いている。

G-Navi の各種プログラムは、神戸大学グローバル教育センターが主催するものであるが、その活動拠点となるのは学外にある兵庫国際交流会館である。兵庫国際交流会館は、独立行政法人日本学生支援機構が保有及び管理・運営を行う留学生宿舎であり、かつ、留学生等が利用可能なフロアスペース「Nadacom Station」がある。G-Navi では、Nadacom Station を主なイベント開催場所とし、各種プログラムを実施している。

本報告書は 2023 年度「ランゲージサロン（中国語)」の担当講師 2 名（四宮愛子、余玟欣）と、ランゲージサロンを含む事業のコーディネートを担当した教員（井上高輔）が執筆した。執筆担当の割り当てについては、前ページの【目次】下に掲載している。

以下、第 2 節でサロンの設計（日程、参加対象者、テーマ設定）を示したうえで、第 3 節で講師の概要を示し、第 4 節でサロンの活動詳細（1 回の流れ、空間デザイン）についてまとめ、第 5 節で参加者から得たフィードバックをまとめ、第 6 節で講師の評価（成果及び課題と今後の指針・展望）を述べ、第 7 節でコーディネーター教員の所感と展望を述べる。

２．サロンの設計

サロンは、2023 年 10/13(金)、10/20(金)、10/27(金)、11/10(金)、11/17(金)、12/8(金)の全 6 回とし、実施時間帯を 18:00～19:30 とした。参加対象者は「高校生以上で、ピンインの読み方を一通り知っていて、中国語で簡単な自己紹介ができるレベル以上の方」とし、Google フォームによる事前登録制とし、サロン期間中はいつでも登録可能で、好きな回に参加できることとした。なお、中国語母語話者の参加も可能とした。

昨年度実施した中国語のサロンでは、対象者を「高校生以上で、初級レベルの学習歴がある方」としていたが、今回はより多くの学習が参加しやすくなるよう、やや対象を広げた形である。受講者間のレベル差が大きくなりやすい設計であるが、講師を 2 名体制とすることで対応することを企図した。また、これまでのサロンでは対象者に中国語母語話者を想定していなかったが、今回は国際交流の更なる推進とサロン内での中国語使用促進を企図し

て、中国語母語話者の参加を募った。

各回のテーマについては、講師 2 名が予め相談・設定した。各回のテーマは以下の通りである。

第 1 回（10/13）	さあ、旅に出よう！（旅行、留学） 出發去旅行吧！
第 2 回（10/20）	夜市に行きたい！小吃を食べたい！（食べ物・飲み物・買い物） 想去夜市、想吃小吃！
第 3 回（10/27）	友達ができた！（学校・地域のイベント・祭り・文化） 交了新朋友！
第 4 回（11/10）	推し活「聖地巡礼」！（音楽・ドラマ・映画・アニメ・SNS） 推活「聖地巡禮」！
第 5 回（11/17）	カフェでまったりしよう！（本・絵本・漫画） 在網美咖啡當文青！
第 6 回（12/8）	ようこそ神戸へ！（神戸を案内する） 歡迎來到神戶！

テーマは、各回単独でも成立し、かつ全 6 回通しても大きな一貫した流れになるようなものを設定した。また、これらのテーマは G-Navi ウェブサイト上で示しており、参加者は興味のあるテーマを選択できる形とした。その場の雰囲気で生まれる会話もあるが、テーマなしでただ雑談を進めようとするのは、焦点が定まらず、初級学習者にとっては難易度が高い。全 6 回に共通するテーマは、「神戸に暮らす中国語学習者が台湾へ行き、現地で知り合いができ、様々な体験をする。そして、今度はその友人に神戸を案内する」というものである。

テーマを予め示しておくことの他の利点としては、まず、参加者が事前に言いたいことや話したいことを大まかに考えたり、関連語彙・表現などを調べたり、準備ができるという点がある。また、おおよその指針ができ、参加者各々でも到達目標（これは知りたい、言えるようになりたいなど）を設けやすく、達成感を得やすいという点もある。

３．講師概要

今回のサロンは、講師 2 名体制を採った。2 名の講師は以下の属性を持つ。

講師１（余玟欣）：L1 台湾華語[1]、L2 日本語
講師２（四宮愛子）：L1 日本語、L2 中国語

今回、講師２名体制を採ったのは、先述した通り、より様々なレベルの学習者に参加してもらえるようにするためという理由がある。加えて、属性・経歴の異なる２名が協力することで、サロンをより多角的な視点で企画・運営することを狙いとしている。語学能力について言えば、講師１は台湾華語ネイティブかつ日本語学習経験者であり、講師２は日本語ネイティブかつ中国語学習経験者であるという対照的な属性を持っている。一方、両者ともに留学経験を持っているという類似点もある。

それぞれの講師のバックグラウンドや留学経験などを通して得た学習者としての視点を活かし、サロンを運営、実施した。同時に、講師２名それぞれが各自の特性を効果的に発揮しつつ、円滑に進行できるよう、役割分担に留意した。大半の参加者の目的は、「中国語で話したい＝ネイティブと話し、これまで学習した中国語が通じるか試してみたい」である。そこで、講師１は、ネイティブとして、参加者からの中国語に関する質問に受け答えするとともに、中国語の知識を適宜示すことを心掛けた。講師２は、参加者と講師１とを橋渡しする潤滑油やサポーターとなるよう心掛けた。具体的には、参加者が発言しにくそうにしている際に助け舟を出したり、参加者同士で発言しやすいよう話題を提供し、参加者同士を繋げることに努めた。また、講師が２名いることは、話題に対する参加者の様々な反応を機敏に捉えやすいという利点もある。

４．サロンでの活動の詳細

４．１各回の流れ

各回、「講師から受講者への一方的な情報伝達」という典型的な講義形式を避け、協働的な学びの空間が形成されることを企図した。まず、アイスブレイク（自己紹介、近況、季節・イベントに関することなど）を行い、その後、発表スライドを用いつつ、講師２・講師１の順に、準備した話題の提供を行なった。話題提供の間は、講師１・講師２が互いに合いの手を入れた。この講師１と講師２のやり取りが、会話のロールプレイ的役割を果たす。次に、講師１・講師２から再度、参加者に話題を投げかけ、話を引き出し、発話を促した。参加者・講師が顔見知りになり、参加者がサロンに慣れてくると、参加者から自発的に話題提供があり、会話が始まることもあった。「講師１・講師２と参加者」、「参加者同士」、「講師１と講師２」の「会話のキャッチボール」が行われるように意識した流れである。

本サロンは、「楽しく話すこと」、つまり参加者の自発的な会話を重視したので、座学形式

[1] 「台湾華語」と「中国語（普通話）」は、両者で支障なく意思疎通ができるものであるが、文法や語彙・表現など異なるところもある。本稿では、今回のサロンの特性を表現するために、「台湾華語」と「中国語」の両語を用いる。

にならないよう、協働的な学びの空間が形成されるよう心掛けた。例えば、お菓子や本などのレアリアを利用したり、写真や動画などの視覚情報も活用し、参加者のリアクションや興味関心を引き出すよう工夫した。また、講師が参加者に写真や動画を見せるだけでなく、参加者からも動画や写真を提供、共有してもらった。本サロンでは、教材となる映像と音声を共有するために、適宜 YouTube を利用した。その際に、参加者から共有したい情報を聞き出して、講師により検索を実施した。

４．２空間デザイン

サロンの開催場所や環境は、参加者の発話や会話にも影響を与える可能性が考えられる。サロンは、2 タイプの空間で実施した。そのどちらでもホワイトボードとスライドやウェブサイトなどを表示するスクリーンを使用した。

一つ目のタイプは、屋内のオープンスペースである。そのため、寮生などがサロンの様子を自由に見ることができるようになっており、多くの人にサロンの活動を周知する機会になると期待できる。他方で、参加者がオープンな空間での発言に抵抗を感じる可能性がある。実際、通行人が行き来し、場所が広かったため、参加者の声が周囲の音にかき消されてしまう時もあった。

二つ目のタイプは、オープンスペースの一角にある半個室である。半個室になっていることで、参加者それぞれの発言や講師の発話などが聞き取りやすかった。また、参加者にとっては、周囲からの視線や雑音が気になりにくかったのではないかと思われる。

初期は、四角の机を二つほど繋げ、その周りに椅子を並べた形で実施した。結果、座り方が机の形に沿うものに固定され、参加者同士の物理的な距離が生まれてしまう難点が生じた。後に、参加者同士が適度に距離を保ちながらも、それぞれの様子が見えるよう、ミニテーブル付の可動椅子を円状に並べる形式にした。

５．参加者からのフィードバック

５．１参加者概要

登録者は 20 名であり、実際に 1 回以上参加したのは 19 名であった。中国語学習者は 13 名、中国語母語話者は 6 名であった。属性としては、「大学、大学院、専門学校等の学生」が 14 名、「社会人・一般」が 5 名であった。

５．２アンケート結果の概要

サロン終了後には、参加者に向けて感想を尋ねるアンケートを Google フォームで実施した。最終回には、終了後にコーディネーター教員からその日の参加者に口頭でアンケート協力を依頼し、かつ、それまでに 1 回以上参加したことのある登録者宛にアンケートフォームをメールで送付した。得られた回答の内、本報告書への内容記載許諾を得られたのは 11

件である。

「サロンの回数（全６回）はいかがでしたか？」という質問に対しては、「ちょうどよい」という回答が７件、「やや少ない」という回答が２件、「少ない」という回答が１件、「やや多い」という回答が１件であった。

「サロンの１回の時間（90 分）はいかがでしたか？」という質問に対しては、「ちょうどよい」という回答が９件、「やや長い」という回答が１件、「やや短い」という回答が１件であった。

「理想のサロン曜日と時間帯を教えてください。(複数回答可)」という質問に対しては、「平日夕方～夜」という回答が８件、「土日正午～夕方」という回答が５件、「土日夕方～夜」という回答が３件、「土日午前」という回答が１件であった。

「サロンのレベルはいかがでしたか？」という質問に対しては、「ちょうどよい」という回答が８件、「やや高い」という回答が２件、「高い」という回答が１件であった。

「今後、実施してほしい言語があれば、お書きください。」という質問に対しては、英語が４件、韓国語が３件、中国語が１件であった。

５．３参加者からの意見や感想

終了後の参加者アンケートでは、「中国語を母国語とする方と話す機会が持てたことと、その国の人と話さないと知らなかった文化を知れたことがよかったです」という声や「参考書ではでてこない単語を知ることが出来てよかった」という声、「実際の対話形式で中国語を話す機会があまりないので、こういった対話形式のサロンでは実践的な中国語力を伸ばしやすいと感じた。」という声があった。中国語母語話者の参加も一定数あったことや会話を重視したことが良かったと考える。また、「先生が二人体制だったのも、書く待ち時間などがなく効率がいいように感じました」という声もあり、講師 2 人体制を採った点も活きている。ただ、「初心者（習いたて）には厳しかった」という声もあり、今後はレベルによるグループ分けを計画する方向性が考えられる。

６．講師の評価

６．１成果

今回のサロンで特筆すべき点は、台湾華語・中国語ネイティブ、日本語ネイティブが、母語話者の視点や学習者の視点から、それぞれの言語の特徴や言語感覚、食文化、暮らしなどについて、素朴な疑問や考えを交流し合ったことにある。とりわけ、参加者の台湾華語・中国語ネイティブと日本語ネイティブの割合がほぼ同等である回は、参加者同士のやり取りも活発に行われ、参加者からの問いかけや発話が多くみられた。

従来のランゲージサロンは、中国語または台湾華語の学習者中心のものであった。過去には中国語母語話者の補佐役が会話練習を支援する役割を果たした回もあったが、あく

までスタッフとしての参加であった。今回は中国語母語話者と中国語非母語話者が対等な立場で参加したことにより、中国語学習者にとっては「ネイティブとの会話」を豊富に行える機会、中国語母語話者にとっては、母語・母文化を人に伝える機会や、日本の文化や情報について知る機会となったと考えられる。大学生や留学生からサポーターを募集し、サロンが多国籍で多様なバックグラウンドを有する人たちが集う場にすることで、より幅広く深みのある国際交流の機会を作り上げることができよう。

また、初参加者に加え、リピーターや知り合いが参加していた回は、参加者がサロンの運営要領を把握していて、さらにそれに加え、参加者と講師が顔見知りであると、話しやすい雰囲気が醸成されやすかったと見られる。もっとも、初参加者が疎外感や入りづらさを感じてしまわないよう、十分な配慮が必要である。

テーマ設定については、今回は「旅」を中心的なテーマにして各回のトピックを構成した。それぞれの内容に身近な話題を取り上げたことによって、参加者は会話に入りやすいとともに、他の参加者とのコールアンドレスポンスもしやすくなったものと考えられる。全 6 回を通して、参加者の関心が高かったのは、料理動画・レシピや音楽配信アプリ、学習アプリなど情報ツールについてである。また、「推し」については、参加者からの話題が尽きることはなく、参加者同士の会話のラリーも円滑に行われていた。参加者それぞれの「推し」は異なるものの、写真や動画など視覚情報を活用したことや普段は接することのない分野であったことなどが、参加者の興味関心を引き出す効果につながったものと考えられる。そして、参加者が「推し（大好きなアニメキャラクターや俳優など)」について話したいと思う情報や知りたいこと（中国語で言えるようになりたいこと）が、各自に蓄積されており、それが発話意欲をかきたてたと分析できる。

加えて、ネット環境の下、プロジェクター及び PC を常時セットし進めたため、会話の中で新しい情報が出た場合、視覚情報をその場で共有できたことが良かった。

６．２課題と今後の指針・展望

他方、何点か課題も挙げられる。第一に、毎回、参加者が異なるため、様々な出会いがある分、場が打ち解けるまでに時間を要した。講師としては、参加者の緊張や遠慮をいかに緩和し、発話を引き出すかを工夫する必要がある。

第二に、「楽しく話す」ことがサロンの目的の一つではあるが、サロンに参加し「なんとなく話した」だけに止まってしまい、「サロンで何を学んだのか、何ができるようになったのか」など成果が不明確になってしまう懸念がある。この対応策としては、各回のサロンの具体的目標を提示し、或いは参加者自身が目標設定する時間を設け、その回の終わりにはまとめや振り返りの時間を設ける。このことにより、話すことに対する参加者の自信を育み、発話の促進にも一役買うと期待できる。

第三に、参加者の中国語レベルのばらつきに関する課題がある。今回のサロンの対象レベルは、「高校生以上で、ピンインの読み方を一通り知っていて、中国語で簡単な自己紹介が

できるレベル以上の方」とした。しかし、実際は、入門レベルから上級レベル、母語話者まで、参加者に大きなレベル差があった。レベル分けは、検討を要する課題である。入門レベルは単語やフレーズレベルの発音練習の段階にあるが、初級レベルは単文を産出し、短い会話のやり取りを続ける練習をする段階である。入門レベルと初級レベルは、学び方が大きく異なるため、クラスを分ける必要がある。かつ、そもそも本サロンは、学校での語学授業における知識の習得とは異なり、自由な会話と練習の場を提供することが主要な目標であることを考えると、特に初級レベルまでの学習者に向けたプログラムを別に用意していく必要性も感じられる。初中級レベルから上級レベルであれば、そのレベル差を活用してサロンを進めることもできるだろう。

第四に、各参加者の発言時間のコントロールが簡単ではない点がある。参加者によって発言への積極性は異なるため、自然と発言量には差が生まれてくる。無論、発言量に差があることが直ちに問題というわけではないが、発言したくとも発言し始めるきっかけをなかなか掴めないでいる受講者がいるとすれば問題である。発言したい気持ちがある受講者をいかに見極め、いかに発言を促していくか、工夫が必要になってくる。

第五に、ネット上の映像・音声などを使用する際の問題点もある。動画サイトや検索エンジンを利用する際に、広告が出る点が問題になる。サロン内容に応じて予め観る情報を用意しておく場合は広告を避けることも可能だが、話の流れに応じて活用していこうとする場合、広告表示を避けることは難しい。

第六に、サロンの撮影・録画・録音についてのルール作りの課題がある。今回のサロンでは、特にそれらのルールを作成していなかった。しかし、参加者と講師双方のプライバシーを保護し、参加者が安心して自由に発言できる環境を提供するためには、一定のルール作り及び共通理解が重要である。参加者への「お願い」として、撮影・録画・録音は厳禁であることをサロン応募フォーマット、サロンのホームページで周知し、加えてサロンの初めにも口頭で説明することが望ましい。

第七に、本サロンの趣旨と目的についていかに共通理解を築いていくかという課題がある。今回の場合、「本サロンは気軽に、楽しく会話をする場であり、大学などの講義や座学とはやや異なること。参加者一人一人が、サロンの重要な構成員であり、積極的な発言を歓迎すること。」といった趣旨・目的が参加者全員に迅速に浸透するように、その伝え方に工夫、改善の余地があったと考えられる。どのような趣旨と目的で開催しているのかをホームページに掲載するだけでなく、口頭でも丁寧に説明する必要性がある。これにより、参加者のより積極的な参加を促進し、発言しやすい雰囲気を醸成できるものと期待できる。

第八に、講師が持つリソースを十分に生かすための工夫の余地がある。講師 1 は台湾華語を母語としており、繁体字と注音が扱えるという強みや台湾の文化を話題にしやすいという強みを持っている。今回のサロンの中でも台湾の文化を取り上げた場面はあったが、繁体字や注音、特有の語彙用法といった台湾華語ならではの知識を十分に生かせる場面はなかった。台湾華語を取り上げたランゲージサロンは過去に一度実施しているが、その時も発

音記号は注音ではなくピンインを用いた。国際理解や文化交流という事業趣旨に鑑み、今後は、注音の使用まで含めて台湾華語を学べるサロンがあってもよいだろう。

７．おわりに

以上、本報告書では、2023 年度 10 月から 12 月にかけて全 6 回で実施した「ランゲージサロン（中国語）」の計画・内容・参加者からの反応、自己評価についてまとめた。本節では、プログラムのコーディネーター教員から所感と今後の展望を述べたい。

今回のサロンは母語話者と非母語話者という属性・経験の異なる講師 2 名に担当いただいた点で特徴的である。各回、異なる視点から話題が提供されたことにより、その後の会話の展開がより豊かなものになったのではないだろうか。またそれだけでなく、サロン内での作業・役割分担にもなるという利点もあった。講師が 2 名いるということは、一方が作業している間にもう一方が別の行動を取れるという強みがある。そして、母語話者の講師は母語話者としての言語知識・経験や現地の文化についての知識・経験を持ち、非母語話者の講師は学習者としての知識・経験や現地での留学生活に基づく知識・経験を持っており、それらが合わさることでより様々な話題を展開できる場が形成されたと言えそうである。

また、母語話者の方々に参加いただいたことも特徴的である。ランゲージサロンは、神戸大学 G-Navi「文化交流」事業の一環として実施しているものであり、「文化交流」事業では地域の人々が国際的に交流することをねらいとしている。母語話者の方々に参加いただいたことは、話題の発展性という意味でも利点があったが、それだけでなく、国際交流を促進するという意味でも、意義があったと考えられる。参加者自体の多様性が、参加者それぞれの国際理解を促したのではないだろうか。

今後は、第 5 節で述べた参加者からのフィードバックと、第 6 節で述べた講師の評価をヒントにプログラムを実施していきたい。参加者からのフィードバックでは、サロンのレベルが高いという意見が見られた。第 5 節で述べたように、サロン内でのレベル分けが方策としてまずは考えられる。それだけでなく、第 6 節で述べたように、初級者に向けた会話学習の機会創出も考えられる。

第 6 節では講師から成果と課題、今後の指針・展望について述べられた。学習者に限らず母語話者をも巻き込んだイベントとできたことは成果であり、今後も参加者の多様性を確保していきたい。課題については、第６．２節で具体的な対応策まで示したものもあるが、第一点や第四点については、どのような対応ができるか、検討を進めていきたい。

謝辞

本報告書執筆にあたり、アンケートにご回答くださったサロン参加者の方々に感謝申し上げます。